

キャンパス通信 ippeki



- 01 特集／
学生有志団体“バスケット”の
活動報告
- 03 学部／
新しい学生生活が求められる中で
- 05 大学院
- 07 講義・教員紹介
- 08 ビブリオバトル
- 09 ひとりを見る目、その目を世界へ

第20号
2020.10 ▶ 2021.3

令和2(2020)年度 日本赤十字九州国際看護大学 卒業式・学位授与式



2021.3.15 学部生120名、大学院修士課程7名が新たな門出を迎えました

ひとりを見る目、その目を世界へ

 日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

学生有志団体 “ビスケット” の活動報告



今年度はコロナウイルスの影響により、新入生が大学に来ることができないという状況が発生しました。それにより、授業はもちろんサークル活動や大学行事など、普段行えていたことが行えず、新入生が「同級生の人たちの顔がわからない」「どんな大学か分からなくて不安」といった、漠然とした不安に駆られてしまったことを受け、本学の4年生を筆頭に「ビスケット」という学生の有志団体を発足しました。

この「ビスケット」という名前には「コロナ禍で不安でいっぱいの新入生を微(ビ)力ながらに助っ人(スケット)します」という意味が込められており、「新入生の先輩たちや同級生との繋がりを増やす」という大きな目標を胸に活動を行いました。主な活動としてTeams*を利用した多学年グループの運営・企画、大学紹介VTRの作成、オンラインにおけるレクリエーションの企画運営、教員有志との共同企画の運営・補助を行いました。私は運営メンバーとして活動していましたが、オンライン環境を活かしたVTR作成に大きく携わりました。大学紹介VTRの作成については、新入生は先輩たちの顔も分からずに緊張しているということが予想されたため、アイスペイク(場の緊張感を解きほぐす)の効果を期待し、コロナを題材とした替え歌をもとにオリジナルのオープニングプロモーションビデオを作成し、気楽に参加できる環境を整えました。新入生は大学の構造がわからない状況にあったため、大学施設の用途や利用方法などを、youtuberの動画構成を参考に作成し、動画の中に字幕で説明の補足をしました。

このような活動を通して私自身も学べる事がたくさんありました。大きくは自分達で一から運営して行くことの難しさです。コロナの影響により大学で会えない状況というのは私達も同じで、Teamsを利用しているものの、なかなか連絡が取りづらい1年生がいたり、回線の問題でうまく接続ができなかったりとハプニングがありました。新しい活動を行っていきにあたり、数々のハプニングが起こったため、今回の活動は、自分一人の力では到底為すことができなかつたと感じています。ビスケットメンバーの、新入生のために何かを行いたいという強い想いがあってこそ取り組む事ができたと強く感じています。活動を通して、新入生からは「先輩や同級生と繋がることができて不安が少し軽くなった」という声や、「シンプルにめっちゃ楽しかったです」などの嬉しい声もいただくことができました。また、私はゲームが趣味ということもあり、ゲームの仲間が増え今でもオンライン上でたくさん連絡を取っている1年生もいます。私自身も本当に嬉しいです。ビスケットの活動を行っていきにあたり、後輩メンバーのたくましさや圧倒されることも多々ありました。私達4年生は今年度で卒業となりますが、頼もしい後輩に出会えて本当に良かったと思っています。卒業してからも安心安心!!また、1年生も積極的に参加してくれる人が多く、エネルギーを強く感じました。そのエネルギーや、今回繋がることのできた先輩や友達を力に、これからの実習などを乗り越えて行って欲しいなと心から思っています。このような活動に参加できたことは、私にとって大変良い経験になったなと心から感じています。(4年生 西尾 悠)

*Microsoft Teams。オンラインでコミュニケーションを図ることができる機能を持つツール。

ビスケット活動 時系列

	内容	備考		内容	備考
4月26日	4年生のメンバー募集開始		6月22日	第一回配信リハーサル	
4月29日	4年生メンバー決定		6月22日	第二回メンバー交流会	
5月16日	企画書(案)完成		6月24日	第六回ミーティング	小グループTeams作成 配信リハーサル
5月22日	先生方とのzoomミーティング		6月25日	第一回配信	
5月26日	企画書完成		6月29日	ビスケット以外のボランティア 募集開始	
6月 2日	2,3年生のメンバー募集開始		7月 1日	第二回配信リハーサル	
6月 5日	メンバー決定		7月 2日	第二回配信	
6月 8日	第一回ミーティング	企画書の共有 役割分担決め	7月 7日	第七回ミーティング	アイスペイキング内容決定
6月 9日	第二回ミーティング	1年生に伝えたいことを決定 アンケート作成を決定	7月 8日	第八回ミーティング	アイスペイキング実践
6月14日	第三回ミーティング	現状報告 タイムスケジュールの確認	7月29日	第九回ミーティング	第三回配信について
6月16日	先生方とのzoomミーティング		8月18日	第十回ミーティング	第三回配信について
6月16日	第四回ミーティング	先生方との話の共有 配信予定について	9月23日	第十一回ミーティング	第三回配信の詳細決定
6月18日	先生方とのミーティング		10月 2日	ポスター完成	
6月18日	第五回ミーティング	広報について 団体名決定	10月 7日	第三回配信リハーサル	
6月19日	1年生向けポータル配信		10月 9日	第三回配信	
6月21日	第一回メンバー交流会		10月13日	先生方とのミーティング	先生方との共同企画について
			10月13日	第十二回ミーティング	共同企画について
			11月 9日	共同企画【ハロウィンパーティー】	

在学生有志団体ビスケットと共同した 教員有志によるハロウィンパーティ

コロナ禍の大学生活を送る1年生に、同級生だけでなく、先輩や教員ともソーシャルディスタンスをとった新しい関係性づくりのきっかけにハロウィンパーティを企画しました。

参加した1年生からの感想

杉原 朋花

今回イベントに参加してみて、話したことがない人と交流ができたのでとても良かったです。また、最初はあまり乗り気ではなかったのですが、待っている間、先輩方がマジックを披露してくれたり、気さくに話しかけてくださったりしたのでとても楽しむことができました。

自分のことでも精一杯になるようなこの時期に、私たち1年生を想ってイベントを計画してくださったビスケットの皆さんと先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

内田 悠都

まずは、ハロウィンパーティーを開催してくれたビスケットの先輩たちに感謝申し上げます。コロナで前期はほぼ登校がなく同級生や先輩と関わる機会が少なかったため、パーティーという機会でも普段、関わりが少くない学生と話することができました。また、同日の予防接種による待機時間も先輩たちに学校内外のことをお話していただき、待機時間も楽しい時間になりました。パーティーでは体を動かすものや頭を使ってグループの人たちと相談するような様々なレクリエーションでも楽しかったです。ビスケットの先輩方、楽しいイベントを開いていただきありがとうございました。

阪倉 莉奈

4年生の先輩方や先生方が、お忙しい中私たち1年生のために素敵な企画をしてくださり、とても楽しい時間を過ごすことができました。風船を2人で協力して運ぶリレー、片足相撲などはソーシャルディスタンスを考慮しながらのゲームであったため、とても工夫されたゲームだったと思います。グループごとのクイズ大会では、人体の構造と機能の問題を先輩方と相談しながら答えを出したため、知識も増えました。そしてこのハロウィンパーティーを通し、横のつながりも縦のつながりも広がったと思います。このような楽しい企画をしてくださりありがとうございました。

佐藤 千尋

少しずつ対面の授業が始まり、大学に同学年の友達は少しではじめたものの、まだまだ不安が多く残っている後期の初めに開催されたイベントでした。グループに分かれて様々なゲームをしました。終始楽しくて参加者の笑顔が絶えないイベントでした。協力的な先生方と優しくて頼れる先輩方が用意してくださったイベントに参加して、1年生へのサポートにも手厚い日本赤十字九州国際看護大学の良さを実感しました。



空飛ぶエキサイティングピンポンはこび♪



各ゲームに勝利したチームには
賞品が送られました!



サプライズクイズ対決!



片足相撲大会



賞品を確認する学生たち



主催のビスケットメンバーへ大学より
感謝状を贈呈しました



みんなで集合写真



学部

新しい学生生活が 求められる中で

COVID-19の感染拡大に伴い、本学では2020年度の前期授業から、積極的にオンライン授業（eラーニング）を取り入れて、感染対策と教育の質保証に対応しています。

今回は、新たに導入したオンライン学修システム、学内実習、就職支援など、コロナ禍での取り組みをご紹介します。



オンライン学習システム“Moodle(もっとクロス)”を導入

これまでのオンライン授業といえば、教師が行う講義を録画し、DVDとして配布する、または動画配信システムを通し、それを視聴して学習するというスタイルが主流でした。ただし、このような学習方法では学習の成果が低い傾向にあることがわかっています。学習成果を上げるためには、Input：入力する（頭に入れる）とOutput：出力する（頭から出す、知識を定着させる）学習方略をバランスよく組み入れた授業設計（デザイン）が重要となります。Moodle（ムードル）は、オープンソースのeラーニングプラットフォームで、教育者が質の高いオンライン教材（学習コース）を作ることを助けるパッケージソフトです。このようなeラーニングシステムを、学習管理システム（Learning Management System：LMS）といい、学習者の学習状況（学習への取り組み時間、小テストの成績と傾向など）も把握できますので、これまで以上に個別的な学習支援も可能となります。

前期は、既存のICTシステムをフルに活用し、Office365のいくつかのソフトを組み合わせた学習支援を実施してきました。また、ネットワークや機器の支援もあわせて実施しています。

今後は、LMS（学習管理システム）を導入して、これまで以上に教育の質保証に努めてまいります。

機器の支援

本学では現在、オンデマンド、オンライン授業を受講するにあたり、ネットワーク環境や機器に障害が生じ、学修の継続が困難な場合に情報処理室の利用をお願いしていますが、自宅でのオンデマンド、オンライン授業の受講を希望する学生に対し、iPadの貸出も行っております。

貸出に準備しているiPadはキーボードを付属しており非常に操作性もよく、持ち運びに便利な収納ケース付です。

今後も学生が遠隔授業を円滑に受講できるよう支援を続けていきます。

※Wi-Fi モデルのため、自宅に Wi-Fi 環境が無い場合は通信ができません。



スクールカウンセラー紹介

奥田 綾子 先生

（臨床心理士・公認心理師・日本学生相談学会認定大学カウンセラー）

はじめまして。2020年度より、学生相談室を担当しておりますカウンセラーの奥田綾子と申します。7年間医療系大学で学生相談カウンセラーとして勤務をし、その後医療系大学を離れ他分野の大学で学生相談に携わっていましたが、この度ご縁があり再び医療を志す学生の皆さんと関われることを嬉しく思っています。

初めて国内で新型コロナウイルス感染者が確認されて1年経ちました。今まで二度にわたる緊急事態宣言が発出され、新しい生活様式のもと大学生活も大きく変わってしまいました。急な変化に適応せざるを得ない状況になりました。人間は、急な変化に対して適応できる力を持っています。もちろん個人差はありますが、無理に過剰に適応しようとすると、身体に弊害が出てきます。疲れやすくなったり、イライラしたり、やる気が出なくなったり…反応には個人差はありますが、正常な反応です。



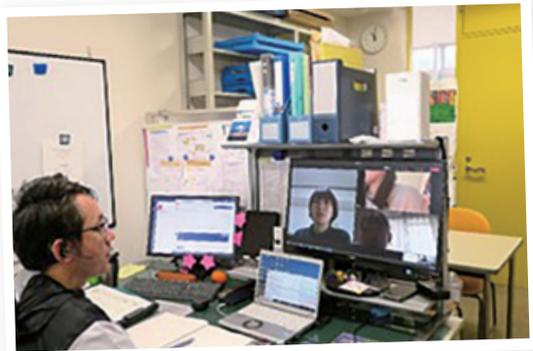
オンラインと学内登校のハイブリット形式の実習

2年生123名は1月18日(月)～2月5日(金)にわたり、レベルⅢ慢性看護実習に臨みました。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、学生は臨地に赴くことができず、なるべく臨床に近いかたちになるように、看護展開を行う事例の情報は日々更新をし、学生が患者さんの変化をリアルに捉えるようにしました。また、電子カルテや動画を提示して、患者さんや臨床の現場をイメージできるように工夫しました。

今回の実習では看護実践として、学内の実習室でセルフケア指導の実践をしました。患者さん役を教員が担い、教員は適宜学生に質問を投げかけたりして臨場感のある指導場面になりました。

また、今回の実習では、多職種連携を学ぶことを目的に臨床工学技士と理学療法士による遠隔での臨床講義を実施しました。質疑応答では、学生から積極的な質問があり、看護師との連携の在り方や多職種のなかで看護の専門性をいかに発揮するかについて考える機会になりました。実習6日目の看護計画発表会、実習12日目の最終反省会では、実習病院の看護師長さんに遠隔で参加をしていただき、臨床に即した実践的な視点からコメントをもらい、刺激を受けていました。

オンライン実習だからこそ学生は調べ学習を丁寧に行い、思考を深めて自分の考えを言語化する機会を多く得ることができました。今回の学びを、3年生のレベルⅣ実習に活かしてほしいと思います。



就職支援

就職活動を始める学部3年生を対象に先輩講演会を実施しました。

12月22日(火)にキャリア支援の一環として、就職活動を控えた学部3年生を対象に、就職活動・進学試験を終えた学部4年生による先輩講演をオンラインで行いました。

看護師、保健師として医療施設等への就職、大学院(助産師課程)に合格した学部4年生から内定、合格に至るまでの、就職・進学試験の対策法、スケジュールや国家試験対策、卒業研究との両立のコツについて、体験談を交えつつお話いただきました。

また、今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、一部の地域では採用スケジュールが大きく変更となったこともあり、就活生としてどのように乗り越えたか触れてもらいました。

参加した3年生からは、次のような感想が述べられました。

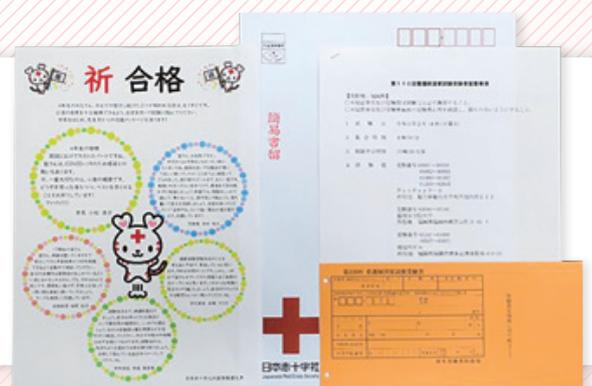
- ・就職活動を進めるうえで何をすべきか分からず、不安があったが、先輩方の体験談を聞くことで、自分の今すべきことが明確化できた。
- ・コロナ禍の中で就職活動を行うことに不安を感じていたが、実際にコロナ禍の状況で、第一志望の就職先から内定を得た話を聞いて安心した。
- ・実習や卒業研究、国家試験対策の多重課題の中、どのように対策をすべきか先輩目線のリアルな話が聞けて参考になった。

国家試験に向けて

2020年度は、COVID-19対策のため、国家試験受験票を郵送しました。

例年、受験前の1月末頃に登校し、久しぶりの仲間の顔と受験票を確認し、「みんな頑張ろう」との思いを新たにしますが、受験直前時期の感染防止を第一に考え、郵送での受験票配付としました。

大事な受験票とともに、学長、学部長、学務部長と学年担任からの温かいメッセージが4年生のみなさんに届き、実力を発揮できたことと思います。





2020年度 修士課程 研究中間報告会を開催しました

児童虐待加害者への支援の現状と課題に関する文献研究

近年、児童虐待に関する報道は尽きず大きな社会問題となっています。平成30年度の児童相談所における児童虐待相談対応件数は過去最多を更新しており、虐待による子どもの死亡も後を絶ちません。つまり、児童虐待は看過できない行為としてその認識が広がっている一方で、児童虐待の問題は変わらず深刻な状況にあると考えられます。

児童虐待が根絶できない理由の一つはその要因にあると考えられます。児童虐待は、身体的、精神的、社会的、経済的等の要因が複雑に絡み合っ起ると言われます。虐待行為は親から子へと世代間伝達することも明らかとなっており、軽度の虐待を含めると虐待の世代間伝達率は約50%にのぼるという報告もあります。以上から、虐待を行う保護者自身が複雑な背景を抱えながら衝動的に虐待行為に至っていることが考えられるため、虐待が繰り返されないよう支援していくことも重要であると考えます。

そこで、児童虐待加害者への支援に関する文献をプログラム中心に整理したうえで、児童虐待加害者への支援の現状を明らかにし、課題を考察することを目的に研究を進めています。その結果、認知行動療法を取り入れたものなど様々な特徴をもつプログラムが用いられることが明らかになりました。一方で、支援者が保護者と信頼関係を構築することの難しさなど、支援の課題も見えてきました。保護者を支える者として、妊娠中から母親や父親などに関わる助産師だからこそできる支援もあるのではないかと考えているので、助産師の視点も踏まえながら、研究を深めていきたいと思います。

(助産教育コース 後藤 咲野花)



「教育経験10年以上の看護系大学における看護教員の『一皮むけた経験』」

私がこの研究に取り組みたいと考えたきっかけは、看護専門学校で教員として働き始めたことでした。当時の私は、なりたい教員像は抱いていたものの、学校組織という制約のある中で、私がしなければならないことが何なのか、そもそも看護教員とは何をすべきなのか、私自身が教員という職務を全うできているのか、次第に見えなくなってきました。そこで私が自信を持って看護教員として成長していけるよう、まさに「一皮むける」ために、この大学院に入学しました。

大学院に入学してからは、私が悩んだ「一人前の看護教員になるためにはどう成長していけばよいのか」という個人の疑問を出発点に、看護教育を取り巻く制度や教員の成長に関する先行研究を調べ、研



究上の問いを少しずつ明確化していきました。そして辿り着いたのが、この「教育経験10年以上の看護系大学における看護教員の『一皮むけた経験』」です。

この研究は、看護教育分野における熟達者である、教育経験10年以上の看護系大学における看護教員が、現在のキャリアを形成する過程において、最も成長したと感じられる過去の仕事上の出来事とは何だったのか、またその出来事をどのように振り返り、いかなる教訓を得たかを明らかにすることを目的としています。研究にご参加いただいた諸先生方からは貴重なお話を伺え、とても勉強になり、また学習の励みにもなりました。まだまだ研究の途中ではありますが、私の研究にご協力いただいた諸先生方の成長の軌跡が形になり、私のように日々悩みながら職務に従事する看護教員の成長の足掛かりになれるよう、努力したいと考えています。

(看護コース(基盤看護) 田原 ゆう子)



2020年度 修士課程 研究中間報告会の講評

11月6日に修士課程の研究中間報告会が開催された。

今回、助産教育コースから5件、特別研究コースの看護教育から2件の計7件の報告があった。

助産教育コースでは、在日外国人への育児支援、就労女性のマタハラ、諸外国の梅毒の母子感染、日本と英国における医療的ケア児、児童虐待加害者を対象とした文献研究の研究経過が報告され、共通してデータ収集から分析に移行している段階という印象であった。

在日外国人の国籍は東南アジアが多くを占めているが国籍によってどのような支援の違いがあるのか、本人のニーズがどうなのか気になる点であり、そのために看護職者にとってどのような準備が必要かが明らかになると意義が大きいと感じた。マタハラ防止に向けて、助産師がどのように関わるのか結果が楽しみな研究である。

性感染症の母子感染については、性感染症が予想以上に増加傾向であることに驚かされた。英国と日本の医療的ケア児と家族への支援の比較では、なぜ英国だったのかと考えたうえで進めていく必要性を感じた。

児童虐待については、虐待の内容が複雑に絡んでいて、リスク要因も多様化している。繰り返される虐待について、加害者支援に着目し現状を明らかにすることで、加害者にならないための防止策の課題も出てくると予測できる。5つのテーマはすべて異なり興味深い内容で、これから助産師として関わる部分はどのようなところなのかが明らかになることを期待したい。

特別研究では、3年課程の専任教員を育成する上での課題について、もう一つは看護教員の「一皮むけた経験」というテーマでいずれも質的記述的研究で丁寧に分析されていた。

意見として、リサーチクエスション、目的、分析の流れに一貫性を持たせること、分析の焦点化などがあり、これから集大成に向けて大きな進歩が期待できる内容であった。

(成育看護領域 大重 育美)



今回発表した7名の大学院生は、その後の最終発表会、論文審査を経て、3月15日(月)に修了を迎えられました。おめでとうございます!

母性看護を学ぶということ

大きく変化する社会の中で、女性とその家族が持つ力を最大限発揮できるケアを学ぶ

少子化、核家族化など女性とその家族を取り巻く環境は大きく変化し続けています。そして、AYA世代(Adolescent&Young Adult:思春期・若年成人)のがんと産後うつ病、DV(ドメスティックバイオレンス)、児童虐待など女性の一生に関連する健康問題が連日大きく取り上げられています。

女性のライフイベントの1つである妊娠・出産の時期を「周産期」とよびます。「周産期」は女性の一生の中で、変化の身体的・精神的・社会的にも変化が大きい時期です。

母性看護Iでは、女性とその家族を取り巻く社会と女性の一生に関連する健康問題について学修し、母性看護IIでは周産期に特化した学修をしています。今回は、母性看護IIIについてご紹介します。

母性看護IIIでは妊娠期・分娩期・産褥期の基礎的知識を学修し、今まで学んだ知識をフル活用し、事例を用いた看護過程の展開を行っています。看護過程の展開を行う中で、女性とその家族が持っている力に気づき、「よりよい子育てができるための支援は何か」、「どのような方法で指導をすると効果的か」と学生間で意見交換をし、女性とその家族が持つ力を最大限発揮できるようなケアを学び合っています。学生が立案した看護計画の中には、「わたしもこんなケアうけたいなあ」と思うケアがたくさんありました。



zoomを用いたオンラインでの講義

担当教員にインタビュー

Q 看護師を目指したきっかけを教えてください

A 家族が全員医療関係者だったので、小さいころから漠然と自分も医療関係に進みたいと思っていました。その中でも特に看護師に興味を持ち、魅力を感じたので看護師という道へ進みました。

Q 看護師として臨床の経験はどのくらいありますか？

A 臨床の経験は6年位です。都内の総合周産期母子医療センターのNICUや総合病院、地域のクリニックで助産師として勤務していました。大学在学中は海外で働きたいと思っていましたが、卒業後の進路を悩んでいた時に母性看護学の教員から助産師という選択肢も提示していただき、その道を選びました。助産師として働くうちに日本の助産師に大きな魅力を感じ、最終的には海外ではなく日本で働くという選択をしました。特に、助産所を開業している開業助産師は、自分の持つ技術や知識、そして五感をフル活用して、お母さんたちの産む力を最大限発揮できるようなケアをされていて、大きな魅力を感じています。

Q 教員の道に進んだきっかけは？

A 助産師として働いているうちにもう少し勉強をしたいという気持ちになり、大学院の博士課程へ進学することにしました。博士課程で研究を始めたら、研究が楽しい!面白い!と感じ、これからも研究を続けたいと思いました。また、臨床でたくさんのお母さんや赤ちゃん、たくさんの助産師と出会い、母性看護学の面白さも感じていました。それを学生に伝えて、母性看護学に興味を持つ学生が増えるといいなと思い教員の道を選びました。

Q 理想とする看護師像は？ 学生にどのような看護師になって欲しいですか？

A 「なぜだろう」とか「どうやったらいいのだろう」と日々探求し続ける看護師が理想だと思います。また、本学は、とても感性が豊かな学生が多いので、その感性を大切にしつつ、知識も持ち併せて看護を実践できる看護師になってもらいたいと思います。

Q 授業では、学生たちにどのようなことについて学んで欲しいと思っていますか？

A まずは、母性看護学は面白いと興味を持ってくれるとうれしいです。女性と家族が持っている力、例えば、子どもを産む力や育てる力、家族と適応していく力などを女性と家族は持ち併せていますが、それを伸ばすためにはどうしたらいいのかを学んで欲しいです。学びについても一人ではなく、いろんな感性を持った仲間と学びあえるように、ディスカッションや、考えたことをアウトプットする機会を取り入れることを意識して講義をしています。いろんな人の意見を尊重できる看護師になってもらいたいと思っています。

Q 学生に教えるうえで難しいと思うことはなんですか？また、どのような工夫をされていますか？

A 少子化や核家族化、新型コロナウイルス感染、虐待やDVの増加など、社会が大きく動いています。対象者はその中で生活しているの、その社会を捉えることが必要です。しかし、対象者がどのような社会で生活しているのかを学生に捉えてもらうことを難しく感じます。法律や制度の話になると「何を言っているのだろう」という表情の学生もいるので、説明するのを難しく感じますが、社会に目を向けることの大切さを伝えたいので、わかりやすい身近な事例を使って興味を持ってもらえるように工夫しています。

Q 印象に残っている学生とのやり取りはありますか？

A 大学院生の時に、SNSを使った育児相談に関わったことがありました。その時の経験を基に、看護師の活躍や育児支援について学生に伝えた際に、学生が大変興味を示し、「このような看護もあるんだ」「自分もやってみたいと思った」との発言があり、そのやり取りが大変印象的でした。学生の持っている力は凄いと、看護師として多くの活躍の場がある学生がもつエネルギーを感じました。



その だ のぞみ
成育看護領域 **園田 希**

略歴

- 2008年 聖路加看護大学(現 聖路加国際大学)看護学部卒業
- 2010年 聖路加看護大学(現 聖路加国際大学)大学院 看護学研究科ウィメンズヘルス・助産学専攻修了
総合周産期母子医療センター、総合病院、有床診療所で助産師として勤務
- 2018年 日本赤十字九州国際看護大学 成育看護領域(母性看護) 助教として着任
- 2019年 聖路加国際大学大学院看護学研究科博士後期課程修了



オンラインで「ビブリオバトル」を開催しました

ビブリオバトルとは、お気に入りの本を持ち寄って、5分間でプレゼンテーションし合い、どの本が一番読みたくなったかを参加者の多数決で決めるゲーム。

日本一を決める大会として、毎年「全国大学ビブリオバトル」も開催されています。

2020年11月10日にビブリオバトル（知的書評合戦）を、初めてのオンラインで開催しました。当日は本学の学生や教職員、宗像市民の方々など、31名の参加者がオンライン上に集まりました。発表者は、計4名。

1番手は、1年生の宮原さん。おすすめの本は『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』です。幼い頃から兵士として育てられた主人公ヴァイオレットが、終戦後、多くの人と出会い成長していく物語です。戦争で両腕を失い、人間らしい感情を持っていなかった彼女が、代筆屋という仕事を通して、人を愛するという感情をどのように獲得していったか、その過程が美しい情景とともに描かれています。「愛しているという感情は曖昧なものだが、とてもかけがえがなく本当に綺麗なものだ」と感じた宮原さん。この本を読んで、すぐにご両親へ手紙を書いたそうです。

2番手は、1年生の榎本さん。おすすめの本は『少女たちがみつめた長崎』です。長崎の高校生たちが被爆者の話を聞き、当時の日記を読む中で、長崎への原爆投下という事実を風化させないために自分たちに何ができるのかを考え、行動していく記録です。いのちの尊さについて考える原点になる本であり、コロナ禍から派生した日常生活の変化やさまざまな差別など、現代にも通じる問題を考えるきっかけとなる、と力強く語ってくれました。「被爆者の方が高齢化する中、その人たちの実際の声を聴くことが大切。まずは聴くことから始めるべき」との言葉が印象的でした。

3番手は、1年生の丸山さん。おすすめの本は『か「く」「し」「ご」と「』』です。中学、高校で経験した「朝読書」の中で一番心に残った本とのこと。「特別なちから」を持つ5人の高校生が紡ぐありふれた日常の物語ですが、お互いの特殊能力を知らない状況で起こる思いの行き違いがとても面白く、同世代だけでなく大人の方にもおすすめの青春小説だと語ってくれました。また、コンプレックスに関して悩んでいる人の気持ちを楽にさせてくれる本でもあるそうです。

4番手は、昨年に続いて2回目の発表となる2年生の峯さん。今回のおすすめは『よい匂いのする一夜』です。小説家の池波正太郎が実際に訪れた温泉やゆかりの宿を再訪して、思い出を振り返りながら旅をしたエッセイです。世の中の移り変わりの中で、100年以上の歴史のある旅館やそのもてなしの心はどのように守られてきたのかを知って感銘を受けた峯さん。今般のコロナ禍で一変した日常で、「幸せ」という感覚を持つことが揺らいでいたが、この本を読んで、一度立ち止まって考えることの大切さ、何百年も揺ぎなく守られてきた伝統に触れて感じる安心感や活力などを感じたと語ってくれました。

投票により、丸山さんが紹介した『か「く」「し」「ご」と「』』が見事チャンプ本に選ばれました。

最後に、小川図書館長から、発表者の魅力あるプレゼンに対する講評とともに、今後、本学でも「朝読書」などの活動を通して読書を広める活動をしていただきたい、との言葉をいただきました。

<紹介された本> 暁 佳奈『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』京都アニメーション, 2015-2016.
渡辺 考『少女たちがみつめた長崎』書肆侃侃房, 2020.
住野よる『か「く」「し」「ご」と「』』新潮社, 2017. ★チャンプ本
池波正太郎『よい匂いのする一夜』講談社, 1986.



住野よる著『か「く」「し」「ご」と「』』
(新潮文庫刊)新潮社, 2017.

大学ビブリオバトル・オンライン大会2020に 本学4年生が出場しました

新型コロナウイルスの影響で中止となった、全国大学ビブリオバトル2020の代替大会として「大学ビブリオバトル・オンライン大会2020」が開催されました。

2020年11月28日から数回に分けて行われた予選に、本学4年生の田中汐佳さんが出場しました。

以下、田中さんのコメントです。

今回参加したビブリオバトルは、新型コロナの影響を受け、従来とは違う方法での開催を余儀なくされました。しかし、様々な人が、新しい様式に順応しようと働きかけた結果、無事に終えられたと認識しています。

また、発表を聞いて、多くの参加者が、この世情の中にあって、「今だから読んでもらいたい」、「今必要とされる本とは?」というある種共通したテーマについて考えていた様に感じました。加えて発表後の意見交換の場がチャットという形で確保されたことなどをはじめ、本について人と語り合う機会の新たな形を知れたこと、本の意義について考えさせられるきっかけになったこと、最終学年という余裕のない時期ではあったものの参加したことで楽しく有意義な時間を過ごせたことは、自分にとって喜ばしいことでした。



イルセ・サン著、枇谷玲子訳、
『敏感な人や内向的な人がラクに生きるヒント』
ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2018.

池田 尚大さん(2004年度卒)

看護師として働きもう15年余りが過ぎました。患者に寄り添い、患者の希望に沿った関わりをすること、ようやく自分の中の「看護観」が明確に認識できた今日この頃。世界まで看ることはまだ難しいですが、管理者として役割を担う中で、病棟・病院と、そんな思いで患者さんを看る目が今の私には広がっています。

患者さんと向き合うときの自分の思いに気付く目、患者さんの希望を一緒に見る目、その目が見据える先に患者さんの幸せが広がるのではないのでしょうか。そんな仲間が増え、一緒に働くことができることを楽しみにしています。



近隣医療施設対抗バスケットボール大会にて、
下段右から2番目が池田さん。

原田 聡子さん(2004年度卒)

毎日、糖尿病の患者さんと関わります。

「また(何度も)昼のインスリンをスキップして悪くなった」、「また糖尿が悪くなったから入院するね、よろしく」こんなことが日常的です。そんな方のことを内心「このままにしたら悪くなるとわかってはいるのに、なんでちゃんとしなのだろう」と思っていました。

しかし彼らの事情をよく聞いてみると、「正社員じゃないから、インスリンしているとばれたらクビになる」「補食すると、サボっていると思われて働きにくくなるからできない」など、インスリン中断や受診ができない環境は、本人の意志ではどうにもならない事情もあることを知ったのです。

それから患者さん一人一人には背景があるということを理解し、「そんな大変な中、来てくれましたね」など労う声をかけていくようになりました。そうすると彼らも、少しずつ心を開いて話してくれるようになりました。

背景を理解せず、私だけの解釈で決めつけてしまっていたことが、本当は健康でありたい思いや良くしたいという思いを潰していたのかもしれない。

私の場合、大学で学んだことはすぐに芽は出ませんでした。しかし、「なぜだろう」ととことん考えること、見えない背景に想像を巡らせること、という大切な種を植えてもらっていたからこそ、大きな樹になる可能性をひめているのではと感じています。

在校生の皆さんも大変なこともあると思いますが、大学でもらった種を大切に育てて行ってください。



大北 帆乃香さん(2016年度卒)

私は今、新型コロナウイルス感染治療後の患者様の受け入れを行なっている病棟で看護師として働いています。

病院では、現在も感染対策のため、面会は全面禁止となっています。そのため、リモートで徐々に患者様を見られたご家族の中には、治療後の患者様の体力・活気の落ちた状態を見て「こんなはずじゃない」「病院の対応が悪いのではないか」と怒りをぶつける方もいらっしゃいます。

なにかもかが限られ、不自由な社会現状。“人を看る目”…。改めて看護師としての存在意義を問い直しているところですが、常に人より多く感じとり、疑問をもち、考えることへの努力は欠かさず行なっています。これは、大学時代にサークルや委員会活動を通し、この努力の重要性を実体験として感じられたからです。何をして、何をしないか、何を考え、何を考えないかも自分で選べる。学生という時間だからこそ、限られた中でも自分で道や方法を模索し、充実した生活を送ってほしいと思います。

この社会現状はしばらく続き、まだまだ大変なことは多いと思いますが、お互いに頑張っていきましょう！



水谷 優一さん(2011年度卒)

私は、福岡赤十字病院で勤務している9年目の看護師です。ICUに所属しており、楽しく勤務していますが、私生活では、できるだけ仕事から離れたことをするように心がけています。新型コロナウイルスの影響もあり、娯楽と接することは難しかったと思います。

そんな私が出会った「楽しい」は、「庭づくり」でした。自宅を購入したのですが、何もしていなかった庭を手入れすることになり、庭に降りるためのウッドデッキを作成し、天然芝を貼り育てました。元々DIYの知識はなく、インターネットを参考に、初めての挑戦でしたが、満足のいく仕上がりになりました。夏には、子供達の色水遊びによってウッドデッキは汚されてしまいましたが、秋には中秋の名月を見るなど、家族と過ごす良い空間を作ることができました。これからもたくさんの思い出をこの庭で作っていかたいと思っています。

新しい春を迎えるにあたって、芝の更新作業、頑張ります!!



考えるきっかけとなるコーナーです。

「後輩と共有したい仕事や生活の“楽しい”」

江上 優人さん(2014年度卒) 江上 茉莉(旧 前田)さん(2015年度卒)

私は福岡県出身で、大学時代はエイサーサークルに所属していました。大学で熊本県出身の妻との出会いもあり、就職は熊本へ。今年4月で熊本赤十字病院入社7年目を迎えました。

内科病棟に勤務しており、これまでチューターシップによる後輩指導、リーダーシップ研修も経て、今では統括リーダーを担って病棟全体をまとめられるように努めています。自分が学んだことや多職種からの意見を参考に看護実践へと活かし、患者さん・家族の良い反応として現れること、また後輩指導を行うことも仕事のやりがいです。

3年前に結婚し、2019年には長男を授かりました。妻も同病院の外科病棟を経て、現在は外来勤務をしており、日々奮闘しています。共働きで忙しいですが、お互い仕事のやりがいを持ちつつ、育児も楽しみながら頑張っています。

COVID-19が流行り始めて、ワクチン接種も開始しましたが、未だゴールの見えない戦いが続いています。学生の皆さんも大学講義・実習や私生活でも思うように過ごすことができず大変かと思いますが、体調に気を付けつつ元気に楽しく過ごしてほしいです。応援しています。



青沼 彩希さん(2017年度卒)

私は消化器や呼吸器等の外科病棟で勤務しており、主に手術や化学療法を受けられる患者さんと関わっています。今年で看護師3年目となり、責任の重さを感じることも多く日々勉強になることも多いです。仕事は忙しく大変なことも多いですが、患者さんが回復し、笑顔で退院されるのを見ると、とてもやりがいを感じます。また、病棟の雰囲気もとても良く、先輩方も温かくご指導くださるため、毎日充実しながら楽しく働くことができています。国試の勉強や自習で大変な日々とは思いますが、私もまだまだこれからだと思っています。ぜひ一緒に頑張りましょう。



1番左が青沼さん、同期と共に。

石光 明日香さん(2018年度卒)

看護師として働いて早2年が過ぎようとしています。2年間はあっという間で、とても充実していました。1年目は社会に出て働くことに最初はとても緊張しており、勉強することも多く、時には逃げ出したいと思うことがありました。しかし、優しい先輩方のご指導や同期と支え合うことで乗り越えることができました。2年目になると後輩ができ、責任感が強まったと思います。不安もありましたが、1番の支えは同期でした。今では行けませんが、よく同期とご飯に行きました。たくさん話をいつもしています。ここまで頑張ることが出来ているのは、同期の存在が大きく、楽しく働いています。コロナ禍ではありますが、みんなで頑張りましょう。



写真右が石光さん。同期と共に。

長島 辰弥さん(2019年度卒)

現在、コロナウイルス感染予防に備え、私の病棟内でも、患者様と十分にコミュニケーションが図れるような方法を考え、チームで連携しながら、感染防止対策を行っています。加えて、1年目として先輩の行動一つ一つの意味を理解し吸収しているのですが、1年もあっという間にすぎてしまい、これから先輩になると思うと不安でいっぱいです。

しかし、そんな中でも患者様と関わる際に「ありがとう」「忙しいのに、頑張ってるね」などと労いの言葉をかけてもらうことが、一番の生きがいになっています。また、技術においても、任せられることもあり、自信につながっています。これが私にとって仕事をしていく中での“楽しさ”となっています。

大学生活で大切にしてほしいことは、“人とコミュニケーションを図ること”です。現在コロナ禍で難しい状況ですが、リモートなどのツールを使用して、積極的に関わりを持っていくことが重要だと考えます。コミュニケーション能力は、大学生活を送っていく中で自然と身につけていくと思っていて、そのためには先生や先輩、そして同級生と色々な話をする必要があります。この4年間で多くのことを学べるよう応援しています。





※写真撮影のため、マスクをはずしています。



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになって
一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名付けら
れました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、学生
・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲しいとの
願いが込められています。

題字：吉田 歩さん（平成26年度 看護学部卒業生）／福岡県・柏陵高校出身

日本赤十字九州国際看護大学

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学

〒811-4157 福岡県宗像市アステイ1丁目1番地

Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<https://www.jrckicn.ac.jp/>

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。寄付
金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは、本
学ホームページでご確認をお願いいたします。